

平成 30 年 8 月 9 日

FD 推進ワークショップ参加報告

情報記録工学研究室 田辺 賢士

日本私立大学連盟（私大連）主催の下行われた平成 30 年度 FD 推進ワークショップ（新任教員向け）が静岡県浜松市の浜松グランドホテルにて行われた。全国の私立大学から 78 人の教員が集まり、A 日程（8 月 7 日-8 日）と B 日程（8 月 9 日-10 日）の 2 回に分けて実施された。私大連が主催するワークショップには主に 2 種類あり、1 つ目が専任教員向けのダイバーシティに関するワークショップ、2 つ目が新任教員向けの大学教員の職能開発に関するワークショップである。今回私が参加したのは後者である。それ故参加者の多くは私立大学に着任したばかりの新任教員が多く、教員が集まるワークショップにしては年齢層も比較的若いように感じた。

本ワークショップでは初めに全体説明があり、その後 6 人程度のグループに分かれてグループ討議や模擬授業が行われた。初日はグループ討議の中で各教員が現在感じている教育に関する問題や課題を共有し、解決案について議論した。その後、最も大きなイベントである翌日の模擬授業に向けて、各自ワークシートを作成し、模擬授業の準備を進めた。2 日目は各教員 15 分の持ち時間で模擬授業を行い、その他の教員が授業の良かった点や改善点などを指摘し議論した。その後全体ふりかえりの時間が長めに取られていたが、ワークショップが行われた 8 月 8 日は大型台風の接近が重なったため、全体ふりかえりの時間を短くし、少し早めに終了することとなった。

私が参加したグループでは会計学、心理統計学、幼児教育学、社会科教育学、農業経済学を専門とする先生が集まったグループであり、理工系の教員は私ひとりであった。全体を見回すとこの傾向はより顕著になり、理工系に分類される教員は私を含めわずか 7 名であった。グループ討議では学力差のある学生に対する講義の工夫する点、少人数では比較的行いやすいアクティブラーニング形式の授業も大人数になると難しい点や、学生の意見を授業に反映させようとした時に深い理解につなげる難しさなどが議論された。私が取り上げた課題は数学などのアクティブラーニング形式の授業を取り入れにくい科目で、どのように授業改善が行えるか、また学生を叱る際にどのような点に注意すべきかというものである。これらに問題点を議論し、いくつかの改善案が出たものや出なかったものもあったものの、全員が議論に参加し、活気あるものとなった。少し変わったところでは所属する大学のディプロマポリシーに基づいてシラバスの達成目標を書く重要性を教えて頂いた点はとても参考になった。

模擬授業では、前日のうちに授業概要をまとめたワークシートを作成しておくという特徴があった。これは 15 分のうち導入、展開、まとめをどのように割り振るか、その時の教員の動きや学生の動き、またその時の留意事項まで考える必要があり、細かな内容まで綿密に設定した模擬授業が求められた。最も興味深かったのは教職を目指す学生向けの模擬授業を行った先生の授業である。この授業の特徴は小学校教員を目指す学生に向けた授業の中で、小学 5 年生に向けた社会の模擬授業を行い、学生に批評させるというものである。模擬授業の中で模擬授業を行うという斬新なスタイルもさるものながら、詳細は省くものの、児童を引き付ける講義の仕方に目を見張るものがあった。そして最後に授業の批評を求められた際はどこに問題点があったのか指摘することができなかった。面白い授業の中の問題点を示した素晴らしい授業だった。私が模擬授業に選んだテーマは普段担当している数学の科目である線形代数

である。模擬授業のルール上、自分が今後やってみたい仮想の授業を行ってもよかったものの、興味深い授業を行えたとしても自己満足にしかならず、また頂いた批評をすぐに授業に反映させることができないため、実際担当している科目を選んだ。ほかの 5 人の先生が人文系であり、学生とのコミュニケーション重視の授業を行ったのとは対照的に、板書中心の授業となった。模擬授業は比較的スムーズに行え、板書が見やすかった、説明が丁寧だった、簡潔にまとまっていた等のコメントを頂き大変ありがたかった。アクティブラーニング形式の授業がとり入れられていない点は、数学の授業ということもあった少し多めに見て頂いた様子だった。模擬授業全体を通してみると、人文系の先生方は学生を引き込むのに様々な工夫を凝らしており、とても上手であると感じた。特に新任教員で私よりの若い先生であってもそれぞれの個性がうまく生きたものになっていた。理工系講義の改善の難しさはあるものの、授業における改善の必要性を痛切に感じた。

本ワークショップでは、コメントする際は評価できる点 7 割、批評する点 3 割に則って行うという原則に基づいて行われていたことを参考にし、少し気になった点もまとめておく。まず理工系、人文系の区分である。本ワークショップでは様々な分野の先生を混ぜたグループを構成し、自由な議論を推奨していた。しかしグループ討議の中で実際自由に議論すると、テーマごとに議論の活気に差が出ていた。私から提案した数学等の授業改善のテーマでは活気ある議論とは言い難かった。数学者の歴史を語ると学生も喜ぶのではとの意見も出たが、現実の数学の授業を鑑みない無責任なコメントのように感じた。もし理工系、人文系の区分をしないのであれば建設的な議論にするための何らかの工夫が必要であると感じた。また模擬授業でも同様の違和感を覚えた。模擬授業の条件として、教具はホワイトボード 2 面（一般的な教室の黒板のサイズだと 1 面分）のみ、そして対面型コミュニケーションを重視という条件が課されていた。しかし数学などの厳密性を重視する理工系科目では 15 分間で黒板 1 面分のみで授業を行うのは困難を極める。また対面型コミュニケーションについても、数学のような答えが 1 つと決まっている科目では学生の意見を取り上げたアクティブラーニングは難しく、アイコンタクトやジェスチャーといった基本的なものに限られてしまう。模擬授業の条件がすでに人文系教員向けに作られており、理工系教員の参加率の低さもこのあたりに現れているように感じた。理工系科目に関する FD 活動は本ワークショップの重要な課題になると痛感した。

最後に懇親会等での他大学、他分野の先生方との交流を通じて全国の私立大学の現状を知りえる良い機会となったことを付記しておく。懇親会等での話題は、大学が力を入れている運動部所属の学生の扱いの難しさ、いびつな教員数と学生数の比率、毎月行われるオープンキャンパスやファカルティの中で FD 活動に対する認識の不一致、私立大学の定員削減の影響など多岐にわたっていた。幸い本学では該当しない課題も多く新鮮な気持ちで聞くと同時に、教育研究環境に恵まれている我々はより熱心に教育研究活動に勤しまなければならないと認識した。